

州民投票の狙い、は何か

ジョン・セイウエル教授に聞く

ケベック州が今春行なう住民投票の狙いは、どこにあるだろうか。そしてそれはどういう結果に終わるだろうか。連邦政府はどのような態度をとるだろうか。筑波大学、慶応大学でカナダ講座を担当し、ケベック問題について詳しいジョン・セイウエル教授に、インタビュー形式でいろいろ解説してもらった。聞き手は毎日新聞外信部副部長の北島霞氏。

政治、経済、いずれにおいても常に敗者でしかない、だから分離して自分たちの文化を守るのが一番だ——というわけだ。

第二に、ケベックの州政府は他の州とは違う文化の守護者であるから、他州よりはるかに大きい権限をもつべきだ、とフランス系カナダ人は考えています。ところが、レベック氏のように、連邦政府と二〇年間も交渉をくり返してきた人々には、ケベックはいつまでたつてもその欲するすべての権限を手に入れることはあるまい、もしそうならば、いつそのことと政治的独立へ進んだほうがよからう、と思われるようになったのです。

北島 カナダは、一八六七年の建国以来、この問題の解決に努めてきたわけですが、今度州民投票が行なわれるということは、こうした努力が失敗したということでしょう。か、それともカナダの将来にとって新しい幕開けと考えるべきでしょうか。

北島 日本は非常に均質的な社会です。そういう社会に住むわれわれには、今年ケベックで行なわれる州民投票の理由はどうも分りにくいですね。そこで、この州民投票の歴史的背景からご説明いただけませんか。

セイウエル カナダの英語系国民と仏語系国民の間には、基本的に文化的な違いというものがあるとして存在しております。フランス系カナダ人は文化的な少数派として、常に自分たちの存続について心配してきました。今日、ケベックには、存続の道は独立しかない、と信じている人たちがいます。英語系国民の支配する国に住んでいる限り、言語や文化、

で、そこから先の一致は全くありません。私は、あとでお話すると思いますが、主権・連合が解決法だとは考えていません。ただ、これについての論議自体は健全だし、そのおかげでみんなが問題解決の必要性をより認識したと思います。

北島 レベック政府としては、経済的状況については現状を維持したいけれども、政治的には独立したいということですね。

セイウエル その通りです。
北島 この二つをどのようにして調和させるつもりでしょうか。

セイウエル レベック首相がなぜ一方で主権あるいは独立を、他方で経済連合を要求しているのか、これは不思議でも何でもありません。
ケベック州民は絶対に政治的独立に賛成しないということを、レベック首相は非常によく知っていますよ。過去二〇年間にわたって世論調査は、すべて、フランス語系カナダ人が独立を欲せず、独立に賛成投票もしないだろうということを示しているのです。

第二に、ケベックが経済的に独立するのは破滅的だということも、現実主義者であるレベック首相は知っています。州以外の国内市場に依存している率はケベックが一番大きく、また州内の第二次産業における雇用を維持するためにカナダの関税に依存しているのもケベックが最も大きいのです。統計から見ると、ケベック以外のカナダがケベックを必要としているより、ケベックの方がもっと

カナダを必要としているのです。ですから、レベック首相としては、政治的独立を達成し、かつ経済的に妥当な道を選ぶため、主権と連合を合体せざるを得なかったのです。ただ、彼が最初求めていたのは、まず独立して、それから経済連合について交渉しようということだったのです。ところが、一九七八年十月になって、「いやいや、両方だ。いずれが欠けてもだめだ」と主張したわけです。言葉も、主権と連合は別々ではなく、あくまで主権・連合なのです。

北島 一種の一括提案ですね。

まず交渉権

セイウエル そうです。

レベック首相は昨夏、ケベックの有権者の考え方を知らぬため、質問事項九十五という、膨大かつきわめて興味深い世論調査を委託しました。そこで独立―賛成一九パーセント、主権連合の交渉を州政府にまかせる―賛成五四パーセント、それからこれは非常におかしな質問ですが、もしケベックが未だ完全にカナダの一部であると仮定した場合の主権・連合―賛成六〇パーセント、といったようなことが分かりました。州政府は、有権者からのこうした回答を念頭に自分たちの政策を決めたのです。

北島 そこでレベック首相は、州民が主権・連合を求める交渉を欲しているかどうかについて投票を実施することになったわけですね。

セイウエル そういうことです。